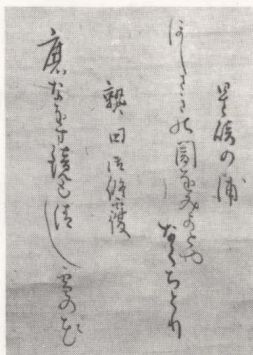


芭蕉紀行文集

付 嵯峨日記

中村俊定校注



人生の本質を無常・流
転に見た芭蕉（1644
- 1694）の芸術と生
涯は、幾つかの旅を
展開点として飛躍を
遂げてゆく。肉体と
精神を日常性の停滞
から解き放ち、新た
な発見に直面させて

くれるもの、それは旅であり、芭蕉の人生観・
芸術観の具体的吐露が紀行文であった。本書に
収めた紀行文は『おくのほそ道』という高峰に
至る道標ともいえるであろう。



黄 206-1
岩波文庫

芭蕉紀行文集

1971年11月16日 第1刷発行 ©

1989年9月14日 第25刷発行

定価 310 円
(本体301円)

校注者 なか中 むら村 しゅん俊 じょう定

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN4-00-302061-8

岩 波 文 庫

30-206-1

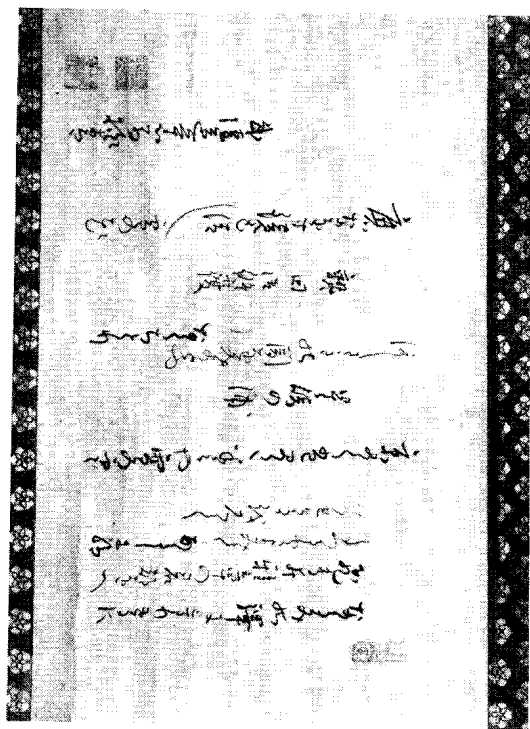
芭蕉紀行文集

付 嵯峨日記

中村俊定校注



岩 波 書 店



芭蕉真蹟機紙

凡 例

一、本書は岩波文庫既収の『おくのほそ道』を除く全紀行文、『野ざらし紀行』『鹿島詣』『笈の小文』『更科紀行』に『嵯峨日記』を加え、校注をほどこしたものである。

一、底本には、真蹟の伝存するものはそれを用い、板本はそのうちの善本と思われるものを採用した。

一、各紀行文の名称・諸本・参考文献についてはそれぞれの扉裏に説明し、必要な参考文献の原文を本文の後に付載した。

一、本文は原則として底本通りにしたが、読みやすくするために、句読点を入れ、濁点をほどこした。ただし底本に濁点のあるものには、・を傍記してその区別を示した。

一、読みにくい漢字、或いは特別な読みを持つ漢字には平がなでふりがなをつけ、送りがなを必要とするものにはふりがなでこれを補ったが、底本についている片かなのふりがなはそのまま残した。

一、かな文字は現行の字体に統一し、本文においては「ニ」「ハ」「ミ」なども平がなとしてあつかった。ただし、参考として付載したもの、脚注に引用した文などは原文のままにした。

一、また、底本にあるかなづかいの誤りはそのまま表記し、正しい歴史的かなづかいを傍記した。
 一、本文の漢字は通行の正字体を採用したが、当用漢字にある字体が底本の字体と一致したものは当用漢字を用いた。又次のような異体字・古字・俗字・略字のたぐいは通行の正字体に改めた。

哥(歌) 鳥・島(島) 广(麻・磨) 乘(桑) 出(出) 姿(松) 柿(柿) 船(船)

一、底本において明らかに誤りと思われる文字は、()をつけて正しい文字を傍記し、または脚注において示した。

一、あて字と思われるものや、かな書きでわかりにくいものは、該当する漢字を()に入れて傍記した。

一、脚注・補注は人名・地名など固有名詞のほか、語句の出典などを重点に、簡略にしるすにとどめた。注については従来の研究書、注釈書に負うところが多い。なお、諸本との校異はほとんど省略した。

一、巻末には簡単な解説、紀行旅程表及び略図、人名・地名・発句の索引を付した。

目 次

凡 例

野ざらし紀行 九

付 天理本『野ざらし紀行』、波静本『甲子吟行』の素

堂序、濁子本の素堂跋、芭蕉書簡二通、俳文五編

鹿 島 詣 三

付 天理本『かしま紀行』

笈の小文 七

付 芭蕉書簡四通、俳文七編

更科紀行 一〇七

付 『さらしな紀行』真蹟草稿、俳文一編

嵯峨日記

.....二三

付芭蕉書簡一通

補注

.....一四

付録

.....一四

紀行旅程表及び略図

解説

.....一五

索引

.....一七

野ざらし紀行

名称——芭蕉自ら命名したものではない。『句兄弟』(元禄七年序)は「芭蕉翁甲子の記行」、『泊船集』(元禄十一年刊)は「芭蕉翁道乃紀」と題し、『歴代滑稽伝』(正徳五年跋)には「草枕共野ざらし紀行共いふ」とある。のちの諸本、月下本(明和五年刊)は「野ざらし紀行」、『蓬萊嶋』(安永四年刊)には「野晒紀行」、蝶夢編『芭蕉翁文集』は「甲子吟行」と題し、『一葉集』(文政十年刊)は「甲子吟行又称野曝紀行」として収める。本文庫は今日一般通行の名称によった。

諸本——真蹟本として天理本(旧菊本本、『芭蕉図録』所収)。藤田本(御雲文庫蔵『芭蕉の筆蹟』所収)の二種が現存する。共に卷子本、後者には插画がある。この藤田本を芭蕉が中川濁子に清書せしめたのが濁子本(三康図書館蔵『俳人真蹟全集』所収)である。写本には孤屋筆写本(彦根専宗寺蔵)、潜居転写本(山崎文庫蔵)などがある。板本としては前記『泊船集』所収が最も早く、次いで月下本、波静編『甲子吟行』(安永九年刊)である。本文成立の過程は、天理本→泊船本→孤屋本→藤田本→濁子本の順と推定される。孤屋本は貞享三年六月初旬の筆写にかかるものである。『芭蕉の筆跡』(岡田利兵衛著)によれば藤田本の筆蹟は貞享前期末から貞享後期の初めと推定されるという。本文庫は藤田本を底本とし天理本を参考として後に掲げた。注釈に輕花坊著『泊船集註解』(文化九年序)、石河積翠著『野ざらし紀行抄』がある。

参考——貞享二年四月五日付其角宛・同年五月十二日付千那宛芭蕉書簡。俳文「士峯の讃」・「竹の奥」・「綴する音」・「酒に梅」・「一枝軒」。『冬の日』『笈日記』『雑談集』『去来抄』『三冊子』。

千里に旅立て、路糧をつゝまゝ、三更月下無何に入と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月江上の破屋をいづる程、風の聲そゞろ寒氣也。

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸を指古郷

関こゆる日は、雨降て、山皆雲にかくれたり。

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

何某ちりと云けるは、此たびみちのたすけとなりて、萬い

たはり心を盡し侍る。常に莫逆の交ふかく、朋友信有哉此人。

一 「適千里二者、三月聚糧」(莊子・逍遙遊)。月下本「千里……寒げ也」の一節なし。

二 「江湖風月集」(憩松坡撰)の偃溪広閑和尚の偈「路不賣(つづま)糧笑復歌。三更月下入無何」云云による。泰平無事の題をのべたもの。

三 古人の心をよりどころにすると、杖にすがって旅立つ意をかける。

四 野に捨てられさらされて白骨となった饑饉(されこうべ)。行き倒れを意味する。

五 賈島の「客舍并州」已十霜、帰心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、卻望并州是故郷(唐詩選・度桑乾)による。

寛文十二年からは十二年目。

六 箱根の関。

七 苗村氏、粕屋甚四郎。大和葛下郡竹内村(現奈良県北葛城郡当麻村竹内)の人。江戸浅草に寓居。蕉門。享保元年七月十八日没。六十九歳。八 互に意気の投合した間柄。

深川や芭蕉を富士に預行あづけゆく

ちり

富士川のほとりを行に、三つ計なる捨子の、哀氣に泣有。

この川の早瀬にかけてうき世の波をしのぐにたえず。露計の命待まと、捨置けむ、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より食物なげてとをるに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝ちゝに惡まれたる狀、母にうとまれたるか。ちゝは汝を惡にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝が性のつたなきなけ。

大井川越る日は、終日雨降ければ、

秋の日の雨江戸に指おらん大井川 ちり

一 富士山の西麓において甲府盆地の水を集め、山梨・静岡を貫流して駿河湾に注ぐ川。最上川・球磨(くま)川と並ぶ日本三大急流の一。

二 『東関紀行』の「此川のはやきながれもよの中の人のごゝろのたぐひとぞみる」(天竜川)によるか。

三 『源氏物語』の「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」(桐壺)による。

四 謡曲「哀猿雲に叫んでは、腸を断つとかや」(鞍馬天狗)。杜甫「聽猿猿寒下三声淚」(秋興詩)。

五 天命。

六 駿河の国と遠江の境を流れ、駿河湾に注ぐ川。

馬上吟ばじやうのぎん

道のべの木むく槿げは馬にくはれけり

廿日餘あまの月かすかに見えて、山の根ね際ぎはいとくらきに、馬上七に鞭むちをたれて、数里とハいまだ鶏鳴けいめいならず。杜牧とハが早行さうかうの殘夢ざんむ、
小夜さよの中山ちやうに至りて忽驚たちまちおどろく。

馬二に寢て殘夢ざんむ月遠し茶のけぶり

松葉屋風瀑ふうばくが伊勢ありに有けるを尋音信たづねおとづれて、十日計足ばかりをとど

む。腰間こしに寸鐵一三をおびず。襟えりに一囊いちふたをかけて、手に十八一五の珠たま

を携たづふ。僧そうに似て塵有ちりあり。俗しやくにゝて髪なし。我僧われそうにあらざとい

へども、浮屠ふとの属ぞくにたぐへて、神前かみまへに入事いるをゆるさず。

暮くれて外宮けぐうに詣侍まうでりけるに、一ノ華表とりゐの陰ほのくらく、御燈みあかし

- 七 杜牧の「垂簾信馬行、数里末二鶏鳴、林下二荷殘夢、葉飛時忽驚（全唐詩杜牧六・早行）による。波靜本「忽驚」とあり「く」なし。
- 八 中国晚唐屈指の詩人。字、牧之、号樊川。世人杜甫に對して小杜と稱した。
- 九 朝早く旅立つの意。
- 一〇 静岡県掛川市日坂付近の名所。險路で狭谷の中山の名おこると言う。西行「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今集）」。
- 二 補注。
- 三 伊勢渡会（わたらい）の人。垂虹堂と号した。江戸住。編著『二樓賦』『丙寅紀行』。
- 四 あいくち、小脇指の類。
- 五 頭陀袋の意。
- 六 梵語 Buddha の音訳。仏陀。僧侶。

處ところどころに見えて、また上もなき峯みねの松風、身にしむ計はかり、ふかき心こころを起おこして、

みそか月なし千とせの杉を抱だぐあらし

西行さいぎやう谷やの麓ふもとに流ながれあり。をんなどもの芋いもあらふを見るに、

芋洗さいぎやうふ女西行さいぎやうならば歌よまむ

其日そののかへさ、ある茶店たちよりに立寄たちよけるに、てふと云いひけるをん

な、あが名に發句いひせよと云て、白ききぬ出しけるに書付かきつけ侍る。

蘭らんの香かやてふの翅つばさにたき物す

閑人かんじんの茅舎ぼうしやをとひて

薦植つたうて竹四五本のあらし哉

長月ながつきの初はじめ、古郷こきやうに歸りて、北堂くわんどうの萱草くわんさうも霜枯果しもがれはてて、今は跡

一 西行「深くいりて神路の奥をたづねればまた上もなき峯の松風」(山家集)。

二 神路山の南にある谷。西行隱栖の跡という。

三 西行の「世中をいとふまでこそかたからめ飯のやどりを惜む君かな」に對して、遊女が「家をいづる人とし見れば飯のやどに心とむなと思ふばかりぞ」と返した説話(撰集抄・江口、遊女歌之事)をふまえたものか。謡曲「江口」にも見え、歌は『新古今集』『山家集』にも収める。

四 『三冊子』に「此句ハ、ある茶店の片はらに道やすらひしてたゞずみありしを、……内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。……いなミがたくて、かの難波の老人(宗因)の句に、葛の葉のおつるの恨夜の霜、とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたり也(赤冊子)とあり、宗因にならったものと云う。

五 『笈日記』に「庐牧亭」と前書。

だになし。何事も昔に替りて、はらからの鬢白く、眉雛寄て、
只命有てとのみ云て言葉はなきに、このかみの守袋をほどこき
て、母の白髪おがめよ、浦島の子が玉手箱、汝がまゆもや、
老たりと、しばらくなきて、

手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜
大和の國に行脚して、葛下の郡竹の内と云處(に)、彼ちり
が旧里なれば、日ごろとまりて足を休む。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

二上山當麻寺に詣で、庭上の松をみるに、凡千とせもへ
たるならむ、大イサ牛をかくす共云へけむ。かれ非常といへ
ども、仏縁にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるぞ、幸にし

六 上古、中国では東房の北堂を母の居所とし、その庭に萱草(わすれぐさ)を植えたという。七すでに母の死去(天和三年六月二十日)したことをいう。
八 兄の松尾半左衛門。
九 『泊船集註解』に「浦島子ノ事扶桑(桑)略記ニアリ。浦嶋の子、神女のあたへし匣を開きて忽白髪になりし事あれば、老たりと云冠辭に置たる也」。

一〇 底本「に」の右に「ハ」を傍記して訂正。

二 二上山麓にある真言宗及び浄土宗の寺。中将姫伝説の「当麻愛茶羅」で名高い。

三 節用集類に「テイシャウ」とある。

四 『莊子』に「見櫟(れき)社樹、其大蔽牛軋之百圍(人聞世)」。

五 『莊子』に「不天斤斧、物無害者、無所可用。安所困苦哉」(逍遙遊)。